昭和三一年
世界大ロマン
緑のダイヤ
訳者　延原謙
発行者　小林
印刷者　中内佐
発行所　東京都小川町
振替電話
定価一

緑のダイヤ

アーサ・モリスン
延原　謙　訳

世界大ロマン全集

4

東京創元社

箱絵

赤穴　宏

緑のダイヤ……アーサ・モリスン　5
霧の夜……リチャード・デーヴィス　177
ある殺人者の日記……マルセル・ベルジェ　243

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

緑のダイヤ

登場人物

フランク・ハーン　国籍不明の商人

ハーヴィ・クルック　世界を舞台に商売している冒険好きな商人

ライマン・W・メリック　アメリカの石油成金

デージ嬢　その娘

シモンズ　競売所の番頭

ベージル・クリフトン　美術骨董愛好家

チャールズ・ノリイ　海洋画家

ジェームズ・プリチャード　クリフトン氏の若い時の友人

ダンカン・マクナブ　ラジャプール丸のボーイ長

プリ　稀代の大詐欺師

ミータ・シン　グーナ王の近侍の長

ジャタージ　その従僕

ウヰックス警部　ロンドン警視庁の警部

第一章　第一のマグナム

ゲーナの眼

一九〇二年も、もはや残り少なになっていた。インド北部の古都デリーの町では、インドがイギリス領になってから初めてのインド皇帝の即位式が行われるというので、その大謁見式に参列するために、何万という人々が押しかけてきた。そしてリッヂの町の北部に接して、歴史に名だかいデリーの町が、恐ろしい勢いでぐんぐん膨脹していった。数万のテント小屋が張りめぐらされ、そのあいだの通路だけでも、延長じつに三十マイルにもおよび、一巡するには力かぎり根かぎり歩いても、優に七八時間はかかるだろうと思われるくらい、瞬くまに宛然たる一大市街を形づくったのである。

いく週間というもの、くる日もくる日も象や馬の足音が夜となく昼となく空にひびきわたり、インド各地の王族たちの旅舎が整然と、それぞれの格式にしたがって設けられたのである。それらの王族たちはみな見栄坊で、競争心がつよく、気位がたかくて、ちょっとのことにも気をまわして嫉み妬むという風で、その発着や出入はいちいち大袈裟に礼砲をもって送迎された。礼砲の数は階級に応じて違っていたが、いずれにしても二十一発以下であった。しかし見栄坊である彼らはみな一様に、二十一発の最高礼遇をうけたいと希望していた。

たちならぶ貧弱なテント張りのなかには、これら数百の王族たちが、かつて戦利品として没収した宝石や、黄金や、高貴な織物などがいっぱいに持ちこまれていた。ダイヤモンドやルビーや、真珠を珠数つなぎにしたのや、さては一ダースそろいのや、とにかく、見栄坊の王族たちが、思い思いに有らんかぎりの宝石類を持ちよったので、このときくらい多くの宝石が一

カ処に集まったのは、恐らく世界はじまって以来ないことであった。それが王族ばかりならばこそ、貧しい小貴族や土豪や、ちょっとした役人までもが、各自装飾として二つや三つの宝石はもってきたのである。そしてそれらの宝石は、いずれを取ってみても、もしヨーロッパへもってゆけば、どこの皇室でも喜んで相伝の家宝の一つに加えられうる資格を十分に備えていた。

なかでも最も名の聞えたのは、グーナの王族の持物で『デッカンの眼』と称せらるる珍らしい緑いろのダイヤモンドであった。『デッカンの眼』は同族間におけるその持主の位置よりもはるかに高い位置を、宝石のなかで占めていた。主人はわずか九発の礼砲をうけるにすぎない身分であるから、やっと第七階級にぞくする王族でしかなかった。そのうえにはまだ十一発、十三発、十五発、十七発、十九発王族があり、全インドで三人しかない最高の二十一発の礼砲をうける王まではよほどの距離があるわけである。

『デッカンの眼』というのはもともとのダイヤモンドの古い呼名であって、いまでは『グーナの眼』といったほうが通りがよい。その光沢といい大きさといい、非常にみごとなものであるが、その来歴についてもなかなか有名な物語りが伝えられているのである。元来色のついたダイヤモンドのなかでは、緑いろのものが最も珍重されているが、この『デッカンの眼』の美しいエメラルドいろの光輝は、かの有名なドレスデンの蒼緑ダイヤモンドにも劣らぬのみか、大きさにおいては殆んどその三倍にもおよぶという、すばらしいものである。型は卵がたブリリアント磨きで、長さは優に一インチ半あり、幅も一インチを越えている。このじつに驚嘆すべきダイヤモンドはいつのころ掘りだされたものか、何人も知るところがない。ただ一千年以来全インドにその名をとどろかし、王族間の羨望の的となり、争闘の原因をなしてきたこと、世間の知るとおりである。そして莫大な代償をもってする交換や、掠奪や、殺人や、叛逆や、窃盗や、戦争までひき起し、そのつど様々な人の手から手へと転々、ついにアクバル大帝の宝庫ふかく蔵せられるにいたって一時安定を

得、その後裔オーラングジーベの死ぬまではそこに納まっていたが、十八世紀の初頭アクバル王朝が覆滅して、国内が分裂するにおよんでその行方が知れなくなった。下ってイギリスの治下に国内が平定して、新たにインド帝国の建設せらるるとともに、グーナ王の所有物として再びその光輝ある姿を現わしたのである。こんどインド皇帝の名によって行われる大謁見式に参列のため、デリーの町にきているグーナ王がすなわちその後継者なのである。

その年が押しつまるとともに、太鼓の音と人馬の足音とがいり乱れて空たかく響きわたり、どのテントもどのテントも王族とその随行の家来とでいっぱいになった。が、それももはや大部分の王族は到着して、ごったがえす雑沓もきれいになってきたある晴れわたった冷やかな夜、テント街の一角にとつぜん、繋がれた象と馬とのさわがしい物音と、人々のけたたましく叫びわめいて立ちさわぐ声がおこった。騒ぎはほんの数分間でおさまったが、すぐに、グーナ王のテントに泥棒が忍びこみ、逃げだそうとするところを王の近侍の長のため一刀のもとに斬り倒されたのだという噂が、テントからテントへと伝わっていった。翌朝、夜のあけるとともに一切の事情が明らかになった。泥棒はその場をさらず斬り殺されていたが、足先から頭の先まで油をぬりたてたそのまっ黒い裸身をよく調べてみると、ある盗賊団にぞくする専門の盗人であることが判った。彼は深夜テントのなかへ忍びこんで宝物を掠め、ひそかに逃れでようとするところを近侍の長ミータ・シンに発見されて、軍刀でたった二太刀に斬りころされていたのであるが――、見ればその手にかの『グーナの眼』を掴んでいたという。

この最後の事実はたちまちのうちに、たち並んだテントの隅から隅まで語りつたえられた。その驚くべき大胆さはしばらく措き、彼がいかにして厳重なる護衛の眼をかすめて宝石に近づいたか、またいかにして宝石をいれた箱の鍵をはずし得たか、それは誰にも説明しがたきいとも不可思議なる事実であった。考えてみるとそこには何らか叛逆的な陰謀ともいうべき暗い影があるようにも感じられる。近侍のなかに裏切ものの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

もあって、秘密を泥棒どもに売ったのではなかろうか？　それは何人にも否みがたい謎であった。それが最後の瞬間にいたって頓挫し、当直の番にあった忠実なミータ・シンのためからくも宝石は安全にたもたれたものであろう。しかし大謁見式の儀が目前にせまっていたので、人々はふたたびその準備のほうに忙殺されて、その噂もいつとはなく彼らの口から消えてしまった。

けれども、その沈黙もながくはつづかなかった。二週間にわたる荘厳な儀式のプログラムがようやく終りをつげて、副王がまだデリーの町を引きあげぬうちに、斬り倒された泥棒の手から取りあげたかの宝石は模造品であって、実物『デッカンの眼』は紛失したのだという噂が、ふたたびテントからテントへと伝えられた。いや、噂というよりもその話が十分の確実性をそなえていたところからいえば、むしろ報道されたといったほうが正当であろう。

他の宝石といっしょに太陽の光線にあててみると、かの『デッカンの眼』は妙に冴えない色をして、少しも光りを放たなかった。それを訝かしく思った王が、抱えの玉工を喚んで検せると、たちまち偽物であるのが明らかになったのである。

いったいどうした事であろうか？　さまざまに説をなすものがあったが、その一つはダイヤモンドをひそかに模造品とすりかえる目的で、二人で組んで忍びこんだところ、仕事の最中を発見されたため、一人は真物のダイヤを手にしたまま闇にまぎれて逃走し、模造品を抱いたほうの男だけが仕事を終えないうちにミータ・シンのため斬り殺されたものだろうという想像であった。さらに説をなすものは、『グーナの眼』は王の一行がデリーへ来ないうち、おそらく数カ月以前か、あるいは数年もまえにすでに偽物とすりかえられていたのだろうといった。してみるとあの泥棒が、三文の価値もない模造品とは知らずして盗みだそうとして、可哀そうに運わるく命までもなくする騒ぎを演じているときに、いっぽう真物の『デッカンの眼』は、すでにどこかで誰かの手に納まってたのだということになる。

以上二つの説のうちで、後者のほうが考えかたも簡単ではあるし、どうも真相らしく思われた。そして警察も王の秘密探偵も、ついに事件の解決をなし得ないときまった時は、いよいよそうに違いないと、一般に信ぜられるにいたった。そのうち儀式のほうが滞りなく終ると、あまたのテントはとり払われて、王族たちはそれぞれの領地へと旅だったが、それらの行列が『デッカンの眼』の失われた顚末を、みちみち語りつたえたので、噂はたちまちのうちに全インドへと拡まってしまった。

この驚嘆すべき事件は各地の市場でかれこれと取りざたされ、嘘も真もとりまぜての噂でもちきった。そのうちにある一つの不思議な噂が、これらの人たちの口から口へと囁やき交わされた。それはグーナのミータ・シンの姿が見えなくなったという一事である。インドでは都会をはなれると今なお暗いことがしばしば行われている。けれどもそうしたことの噂は、市場や街の隅で土人たちの間にこそ耳ざとく囁やきかわされている割合に、イギリス人たちの耳に入ることは案外すくなかった。ミータ・シンの失踪したことも、だから、そちこちでとり沙汰され、もはや誰もそれを疑うものはなかったが、いかにして彼が失踪したかということは、誰ひとり知るもののない不思議な謎であった。しかし、王はそんなのん気な気持ではいられなかった。王は『デッカンの眼』を愛惜する念がふかかっただけに、その心はつよい忿怒にもえていた。そしてダイヤモンドを守護すべき役目にありながら、それを失ったばかりか、自分の権力を十分にのばすことのできないイギリス政府治下のどこかへ隠れてしまって、それをふたたびとり返すことのできぬ近侍の長を戯罰に附そうと考えた。それが彼の責任であるか否かは、調べてみる気すら起さなかった。疑いをかければ皆が疑われるのだ。とにかくあの夜デリーの旅舎で泥棒を斬り殺したミータ・シンの行方こそ『グーナの眼』そのものの行方にもまして不思議なる謎であった。

十二本の葡萄酒

デリーの大謁見式の見物には土人ばかりでなく、ヨーロッパ人も少なからず集まってきたが、なかには商用をかねて来たものも多少はあった。ヨーロッパやカルカッタの会社から出張できたものもあったし、また独立の商人もあった。そのなかにハーンという男があった。彼はとにかくヨーロッパ人で、何でも扱う商人、安く仕入れて高く売ることさえできるなら、およそ世界中にありとあらゆる品——すなわちイタリアの古い名画から台所用の安い家具の類にいたるまで、何でもとり扱わぬ物はなかった。たいがいは英語をつかって、みずからフランクと名のっていたが、フランツというドイツ名で呼びかけるものもあった。そういえば流暢ではあるけれど、彼の英語にはどこかドイツ風の訛りがかすかにあった。しかしあるものは、彼がまえにつかっていた名はフランクでもフランツでもなく、姓もハーンではなかった、もともとガリシアで初めて商売をおぼえた男だともいった。そのハーンはあちこちで取引をした。ある時は自己計算の売買もしたが、またあるときは手数料をとって依託品の取扱いもやった。そのうちに彼は十九世紀の初めごろからデリーのある大きな穴倉のなかへ入れ忘れられていた古いトーケーの葡萄酒の大瓶を一ダースだけ、たいへん安く掘りだした。それから間もなく、謁見の儀式の行われている最中に、わるい熱病に冒されて床についたが、到底起きられそうもないというので、ハーヴィ・クルック氏に来てもらうように使をやった。（トーケー葡萄酒はハンガリ産の強い酒マグナム瓶は約一升三合はいる大瓶—訳者）

ハーヴィ・クルックは商人であるが、普通の商人とは少し趣きを異にしていた。彼は彼一流の取引によって収益を得ていた。一言でいえば、世界中をとびまわって、ときにはずいぶん冒険もして儲け仕事をしていたのだ。そこに普通の商人とすこし毛いろを異にするものがあった。彼は頑強な、中背よりもすこし小さいくらいの男で、年中旅ばかりしているので顔は日にやけて黒くなってはいたが、イギリス人として並はずれた黒さというほどではなかった。眼の鋭い、猫のように敏捷な男で年は三十五歳であった。

彼とハーンは大して親しい仲ではなかった。したが

ってハーンの使いをうけた時は、ちょっと訝しく思った。しかし考えなおしてみると現在デリー界隈にいる人たちのうちで、ハーンよりも親しい人といってはほかになかった。それで、大して気のりはしなかったが、とにかく葉巻をつけなおして、ぶらぶらとデリーの街を歩いていった。

訪ねてみるとハーンは、ホテルが手狭なため臨時に借りたした家の一室を暗くして臥っていた。しかしひどく悪いような様子もなかった。年の暮なので熱病の流行する季節でもなく、それにさして悪くもなさそうなのに部屋のなかを暗くしてあるのを彼はちょっと妙に思ったが、心から嬉しそうな様子で親しげに彼をもてなすハーンの様子でみても、病気がさほどでないことは、ますます明らかに分った。

「やあ、クルック君、ようお出でくだすった。どうも暗くはあるし、心細く思っていたところなんで、地獄で仏の思いがします」ハーンの挨拶にはドイツ訛りらしいものがあったけれど、ほとんど聞くものの注意をひくに足りない程度だった。

「どう致しまして。いかがですか？　もうよほどお宜しいようですね。何しろご病気にはどっちかと申すと凌ぎやすい季節なのが、何よりです。」

「ありがとう。ですがこんどは大分ひどくやられましてな。いまはちょっと良いようです。それもこの一時間ばかりはな。でもすぐまた悪くなるかも知れません。ときにあなたはいつお帰りですか？　すぐにご出発でしょうな？」

「そうです。この騒ぎのすみ次第、つぎの便船でボンベイを発ちたいと思っています。幸い船の切符も買えましたし……ずいぶん混んでいますからな。」

「ラジャプール丸ですな？　郵船ではないでしょう？」

「そうです。郵船ですと出帆が一週間おくれるようです。ラジャプール丸は船足はのろい船ですが、ほかに致しかたもありませんから、まあ、あれに決めました。何かおことづけでもありましたら……」

ハーヴィ・クルックは寝台にちかく坐っていたので、ハーンはその手をとって

「箱を一つお願いいたしたいのですが、葡萄酒の箱で

す。いかがでしょう、いずれお礼のところは十分にいたしますが、何しろ値のある品なので……」

ハーヴィ・クルックは荷物といっては手廻りの物だけなので、身軽だった。

「承知しました。しかとお引受けいたしました。あちらのお得意まで届けるのですね？」

「いやいや、得意さきへじゃなく、ただあちらまでまちがいなくお持ちねがえればよろしいので。失礼ながら費用のところは、いっさいわしのほうで持ちます。売れれば、そうですね、百ポンドはまちがいなく儲かる品です。とびきり上等のトーケー葡萄酒ですがね、大瓶で一ダースあります。何しろ八十年という時代つきですからな。そのあいだ誰にも知れずに埋まっていたのを、わしが捨値同様に引取ったのです。ほかにもごたごたしたものが少しばかりありましたがね。あるいはモンゴル王朝の献上品の一部だったかも知れません。何しろ珍らしいものでご厄介でも一つお願い申します」

「よろしうございます。承知いたしました。ですがイギリスへ持って参ってからどうしますか？　じつは少し急ぎますので……」

「いや有りがとう。それで安心しました。如何です、それはお発ちの日までに、何分のことを申しあげますが、もしかして間にあわないようでしたら、イギリスへお着きになるまでには、手紙を差しあげることに致します。ラジャプール丸より一週間おくれて出る郵船が、たしか四五日はやく向うへ着くことになっとるようですからな。また何でしたら電報を打ちましょう。とにかく向うへ上陸すれば、必ず電報なり手紙なりで処置方法をお知らせすることに致しまするで、その点決してご迷惑はおかけ致しません、何しろはやくお渡ししてしまわんことには安心できませんので……すぐにお持ちをねがえましょうな？」

「いいですとも。品物は？　ここにあるのでしたら、ちょっと馬車を呼んできます。」

「それはどうも重々のご厄介で恐縮ですな。何しろこのへんには信用のできる男が一人もありませんのでな。どうもあんなドイツ人どもの性わるには何として

も頼む気になりませんで……」ここでドイツ人といった言葉に、ハーンはまたしても妙な訛りをだしたけれど、それは気のつかぬほどの程度であった。ハーンはなおも言葉をつづけて、「それでこれは何としてもあなたにお願いするしかないと思いましてな。失礼ながら何事でも安心してお願いのできる人と申しましては、クルックさん、あんたを措いてほかにはありませんて。」

「どうも、そんなに仰しゃると、かえって恐縮です。」クルックは少し鼻じろみながら笑った。

「いや、ほんとです。あんたならいつどこでどんな事をお願いしても安心なものだと、いつも思うとりましたよ。」と自分より年下の男の顔をじっと見入った。ハーンはもうじき五十歳になる、頬から顎にかけてごま塩の髯を短く刈りこんでいる男だった。

「何しろ妻子のことを考えますと、こういう大切なことはめったな人には頼めませんでな。わしも近来は不運つづきで、あんたがたから見たら可笑しいでしょうが、百ポンドはなかなかの大金ですからな。ところでロンドンのお宿はどちらですかな？」

「宿はスタンディシュ・ホテルですが、お手紙ならアボリヂン・クラブ気付でも結構です。」

「いや大きに有りがとう。おかげさまで助かります。」とハーンはクルックの手を熱誠こめてかたく握った。

「馬車はもう参るころですな。お引きとめして何とも申訳ありません。それではどうぞ途中十分お気をつけなされて……それからあの瓶は一つでも損じて一ダースが欠けると大変なことになりますんで、じっのところあんたのお手を煩わすというのも、一つにはそれがあるからでござりましてな、どうぞこのうえともお気をつけ下さるよう、くれぐれもお願い申します。それではどうも、汚いところへお越しを願いまして、まことに失礼なことで……」

ハーヴィ・クルックは妙にくすぐったいような、愉快な気分でそこを出た。ハーンはじつに気の小さい、愛すべき男ではないか。わずか八、九十ポンドの葡萄酒で、たんなに夢中になって騒いでいると思うと、おかしくさえなってきた。病熱にでも浮かされているの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton